

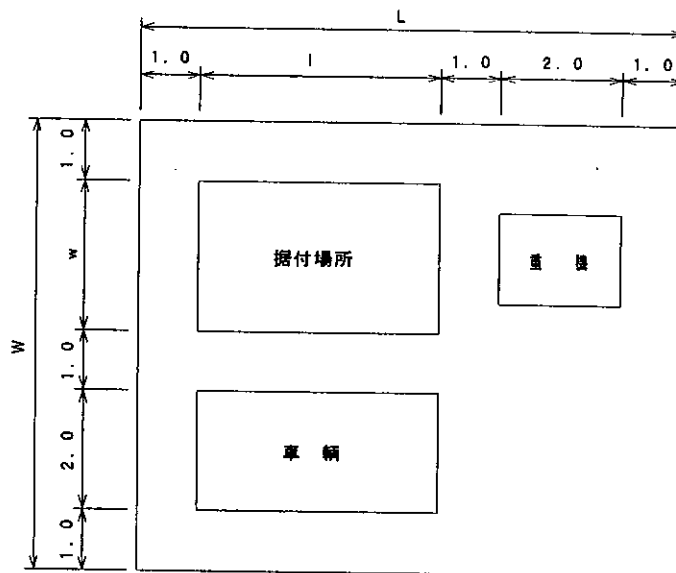
5. 施 工 要 領 書

- (1) 許容地耐力、最深積雪量について
 許容地耐力・・・5 t/m²
 最深積雪量・・・100 cm

- (2) 施工に必要な広さ
 施工条件 (支柱を設ける場合)

	槽幅(m)	槽長(m)	スラブ幅(m)	スラブ長(m)	仕上がり面積(m ²)
NS-5	1.10	2.60	1.9	3.4	6.5
NS-6	1.36	2.63	2.2	3.5	7.7
NS-7	1.36	3.04	2.2	3.9	8.6
NS-8	1.69	2.94	2.5	3.8	9.5
NS-10	1.69	3.60	2.5	4.4	11.0

- (3) 浄化槽機材の搬入、残土搬出に必要な広さ



	w(m)	l(m)	W(m)	L(m)	必要面積(m ²)
NS-5	1.9	3.4	6.9	8.4	58.0
NS-6	2.2	3.5	7.2	8.5	61.2
NS-7	2.2	3.9	7.2	8.9	64.1
NS-8	2.5	3.8	7.5	8.8	66.0
NS-10	2.5	4.4	7.5	9.4	70.5

- (4) 堀削深さ

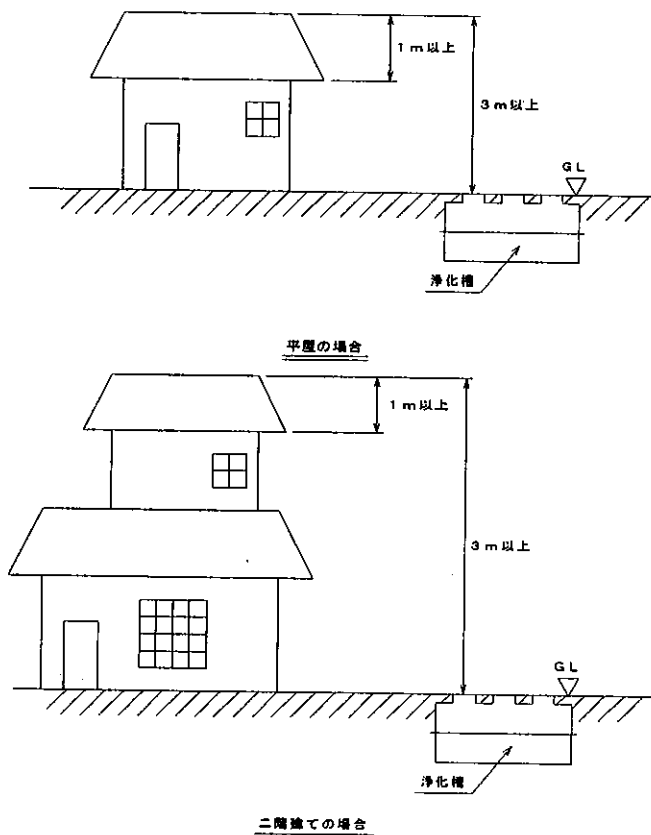
	標準		高さ300	
	人道	駐車場	人道	駐車場
上版コンクリート厚さ(cm)	10	18	10	18
底版コンクリート厚さ(cm)	20			
堀削深さ (m)	2.125		2.425	
捨てコンクリート厚さ(cm)	4			

(5) 流入管、放流管の管底

	標準	嵩上げ300mm
流入管底 (cm)	25	55
放流管底 (cm)	40	70

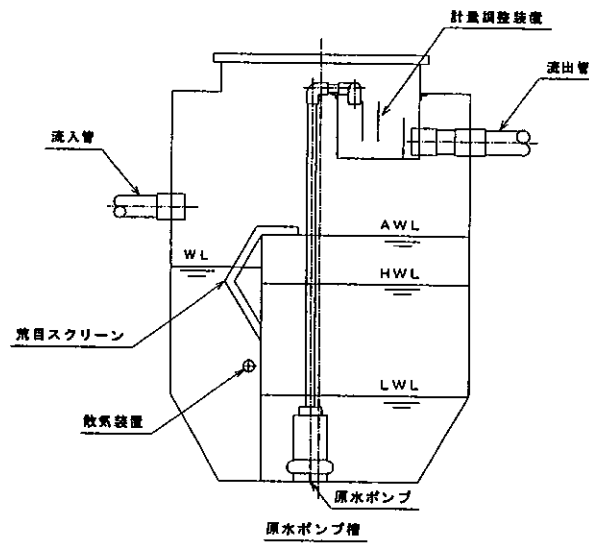
排気管・立ち上げ管 (防臭対策)

- 1) 臭突管を設ける場合は所定の場所まで横引管を延ばし、エルボ等を用いてなるべく近隣の関係を配慮し、通風のよい場所を選んで立ち上げて下さい。
- 2) 立ち上げの高さは、隣家等付近の住居を考慮にいれ、苦情の生じないように最低3m以上で横引き長さの2倍以上としたり、あるいは管径を太くしたりして、軒上1mまで上げて下さい。
(横引管はなるべく短い方がよいことになります。)
- 3) 風などで倒れないようにサポートをつけて下さい。
- 4) 横引管の勾配は、浄化槽に向かって下り勾配に配管して下さい。
- 5) 排臭ファンは換気風量がブロー風量の10倍以上得られるものを取り付けて下さい。



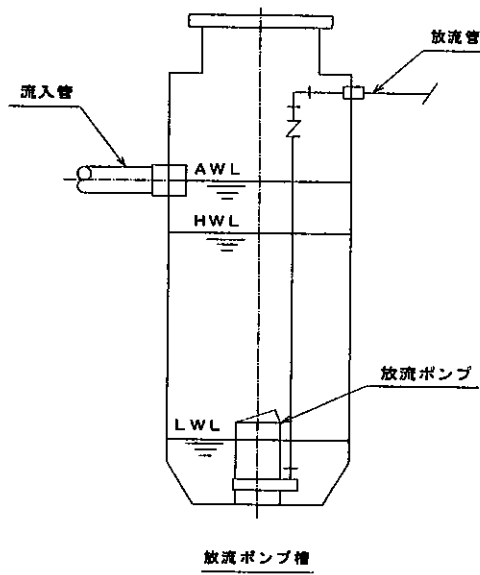
- (6) 流入（原水）ポンプ槽、放流ポンプ槽が必要な場合の対策
 施工の条件により、流入、放流ポンプ槽が必要となった場合は、次の点に留意して下さい。

1) 流入（原水）ポンプ槽



- a) 流入水中の固形物によるポンプのつまりが無いようスクリーンを設けて下さい。
- b) ポンプの口径については50mm以上として下さい。
- c) 流量調整機能を有する構造として下さい。

2) 放流ポンプ槽



- a) ポンプの口径については40mm以上とし、揚程は排水満の水位高を確認し十分な余裕が必要です。又、放流先までの距離等についても確認が必要です。

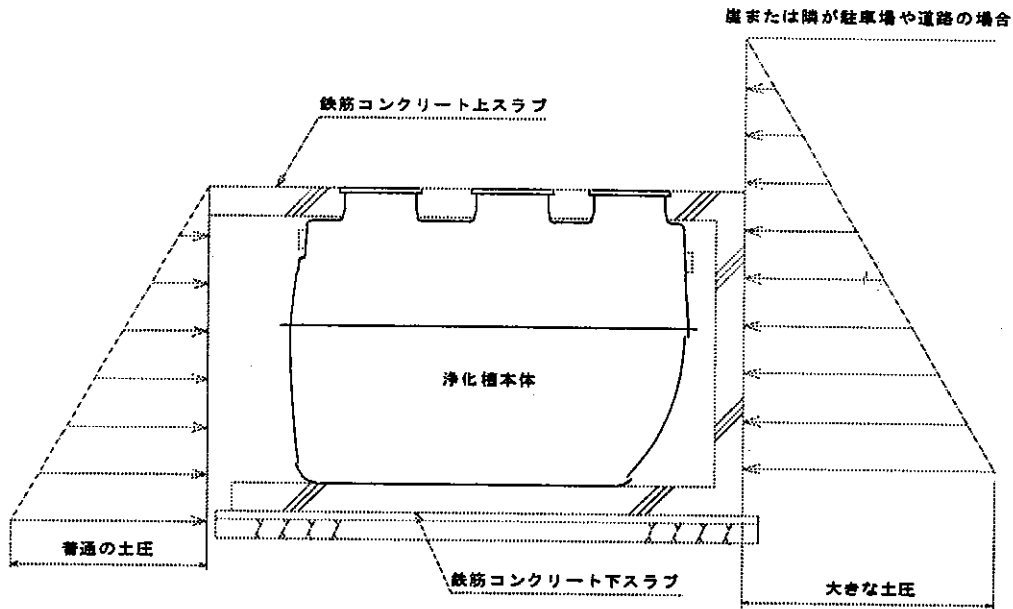
(7) 上部を駐車場に用いる場合の補強方法、その他特殊な荷重のかかる場合の補強方法

1) 駐車場に設置する場合

- a) 乗用車程度及び敷地内車両通行
- b) 大型車両が通行する場合には、車両の種類及び通行状況を当社にご相談下さい。適宜設計させていただきます。

2) 崖下に設置する場合

崖下の場所に設置する場合は、図のように浄化槽は平地に設置する場合の数倍もの土圧を受けますので、土圧が大きい崖面の側に土圧に応じたコンクリートを設けて土圧を遮断する方法を講じて下さい。



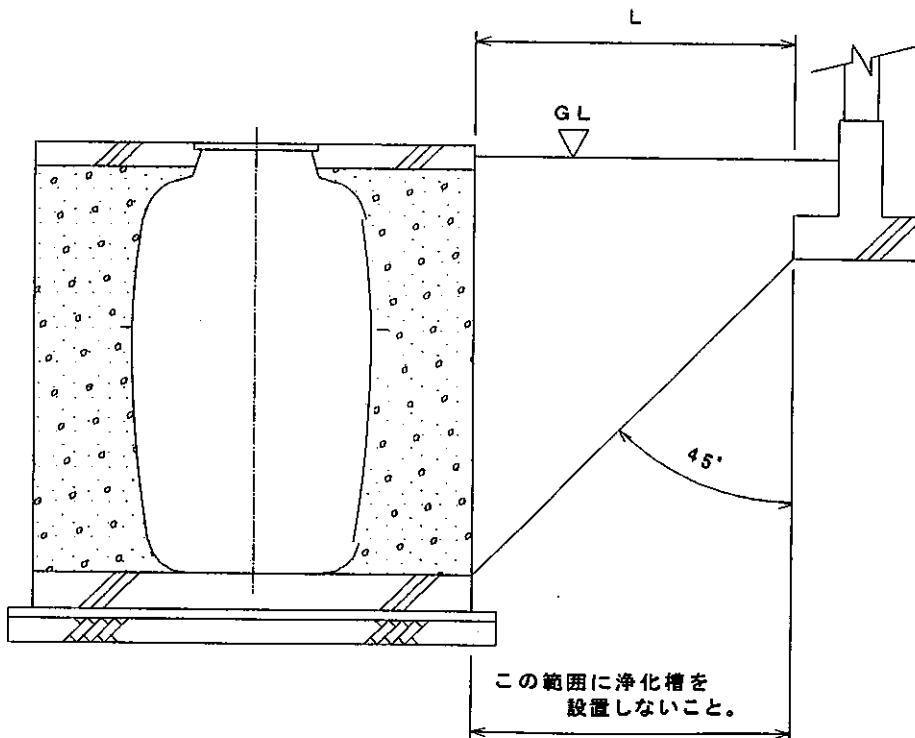
3) 周囲に構造物がある場合

a) 敷地が広い場合

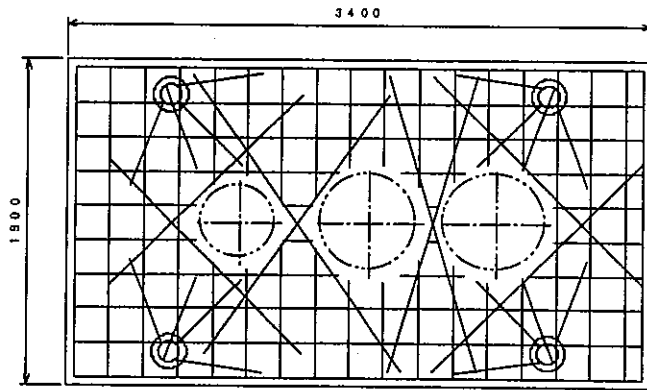
図のように建物の基礎の外側から45°の線の外に設置して下さい。

b) 敷地が狭い場合

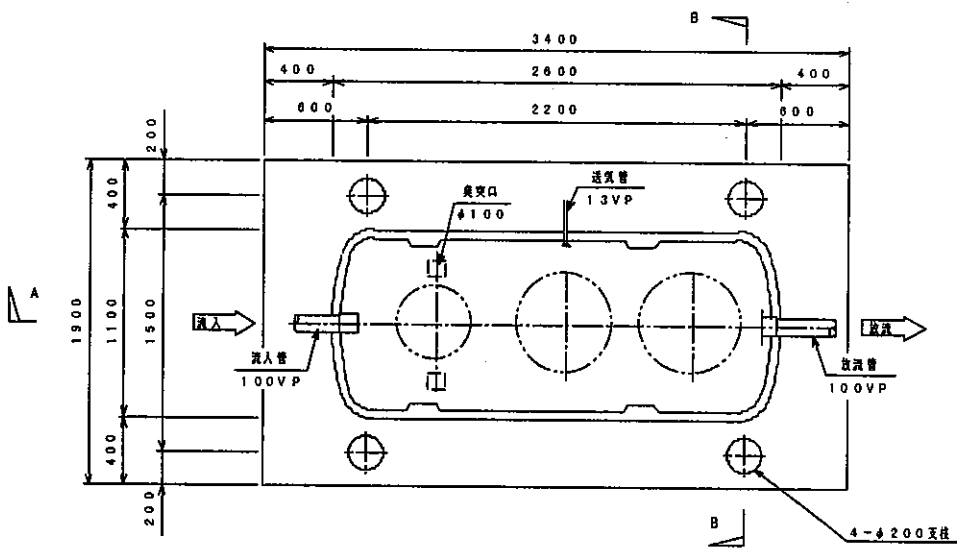
6ページの図のように鉄筋コンクリートの擁壁を設けて下さい。



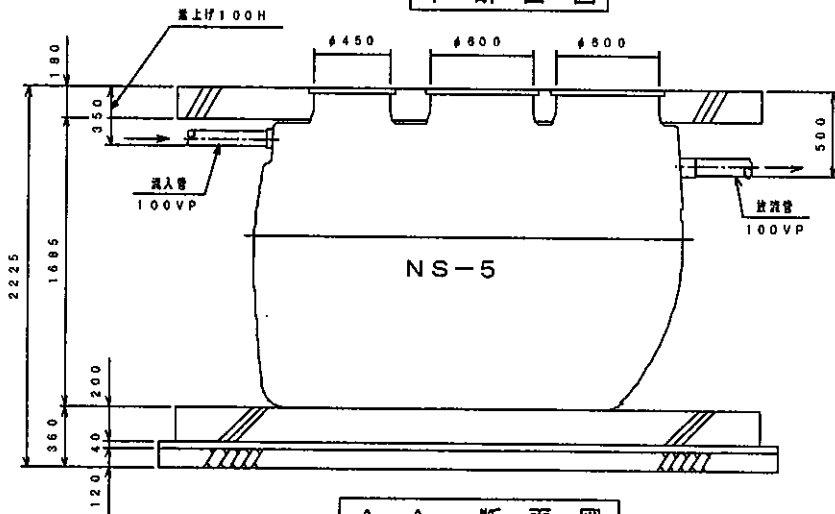
Lの距離は浄化槽の高さだけ離して下さい。



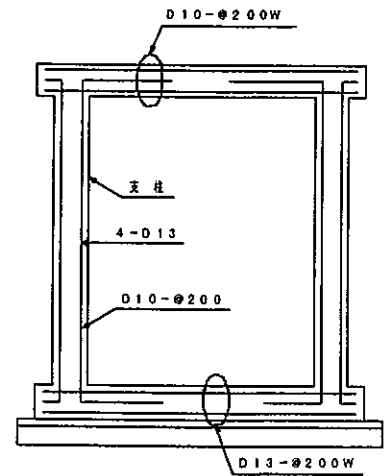
平面図



平断面図

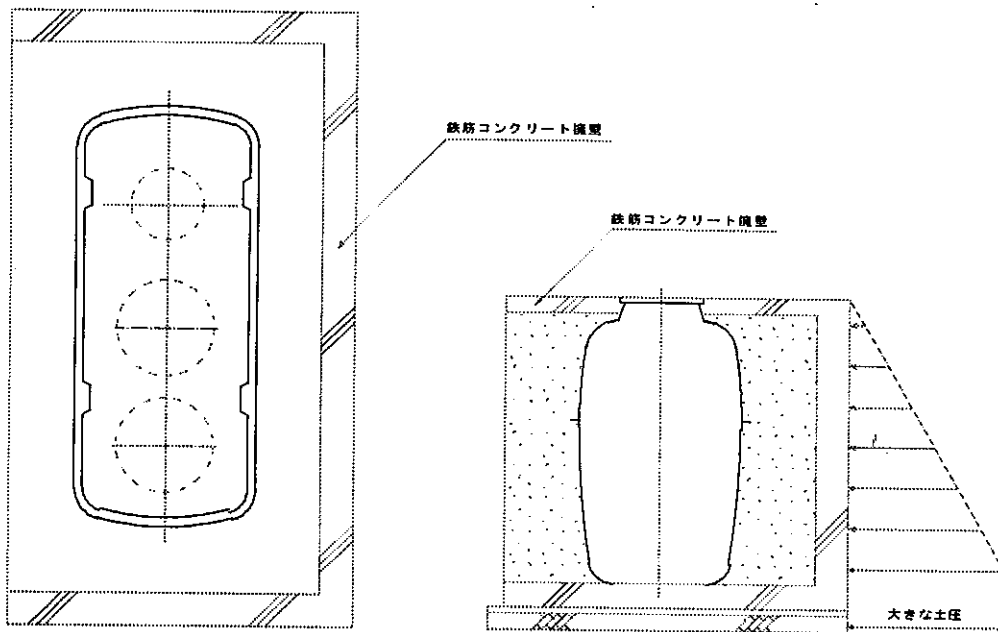


A-A 断面図



B-B 断面配筋図

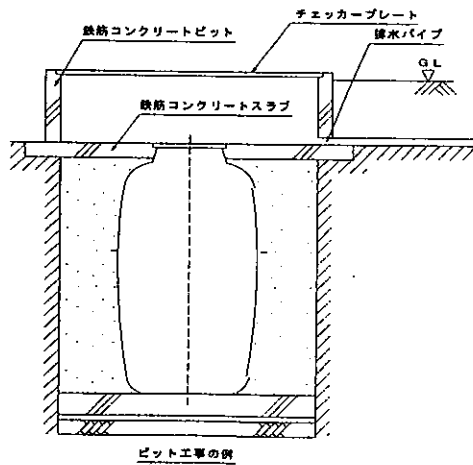
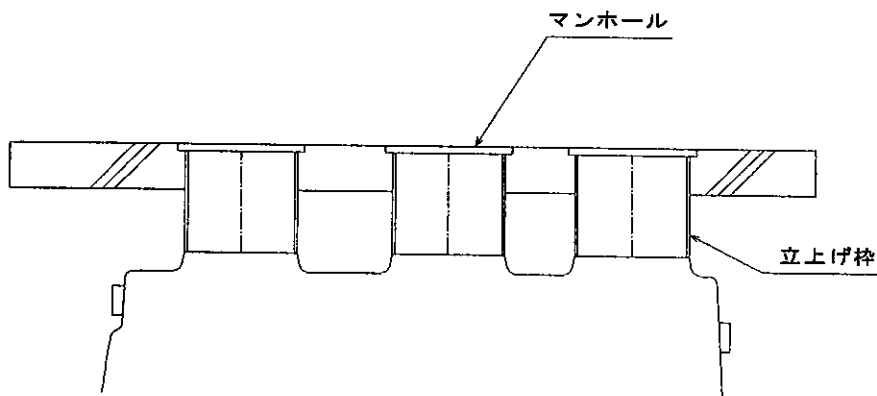
注) 他の機種についても同様です。



建物の基礎と離せない場合は本図のように擁壁を設けて下さい。

(8) 深埋め工事の方法

流入管底が標準工事より深くなる場合は原則として原水ポンプ槽を前置する。止むを得ず深く埋める場合は嵩上工事、ピット工事を行って下さい。



(9) ビルの地下、地上あるいは屋内に設置する場合の工事の方法

1) ビルの地下に設置する場合

- a) 浄化槽の処理機能上炭酸ガス、硫化水素などが発生する。又、湿度が高くなり電気系統に支障をきたしやすいので換気設備が必要です。尚換気能力としては室内の換気を1時間につきおおむね10回以上として下さい。
- b) 維持管理に支障をきたすことがないように開口部の上部は特にスペース等配慮して下さい。
- c) 清掃の際、直接バキューム車のポンプで汚泥を引き抜くことが出来ない場合は、中間に中継用の汚泥ピットを計画して下さい。

2) 地上に設置する場合

- a) 槽本体を固定用金具で基礎に固定し、地震時の転倒に対しての安全対策をとることが必要です。
- b) 槽本体は長時間紫外線に暴露されるので、必要に応じて槽表面に耐候性塗料を塗布して下さい。
- c) 設置後の保守点検、清掃のし易さを考慮して点検口の周囲に点検歩廊を設けるなど作業スペースを充分にとり、階段や手摺りを設けて下さい。

3) 屋内に設置する場合

- a) 基本的には1)の地下に設置する場合と共通であるが特に屋内ということでブロワ、ポンプ類の振動や騒音には事前に対応を検討して下さい。
- b) 建物との関係で槽本体に荷重のかかる場合には支柱工事等が必要です。

(10) 積雪対策、寒冷地対策、地下水位が高い場合の工事の方法及び浮上防止対策

1) 積雪対策

(1) で最深積雪(100cm) 210kg/m²を越える可能性がある場合は $W_s = 3 \text{ kg/cm/m}^2 \times 0.7 \times \text{積雪深さ (cm)}$ の荷重に耐える構造とする必要があります。

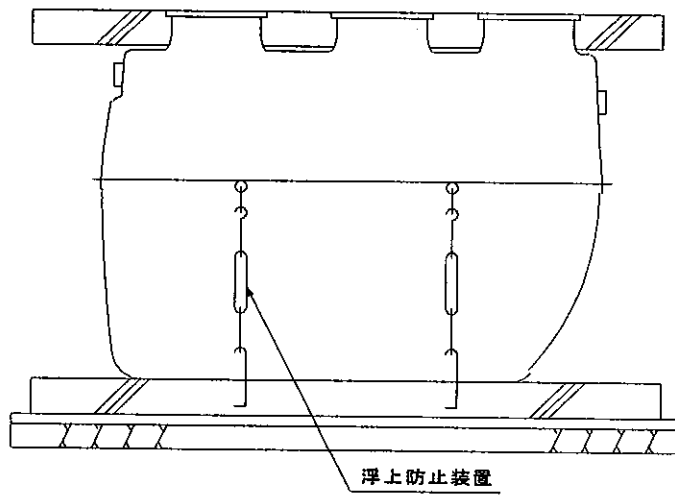
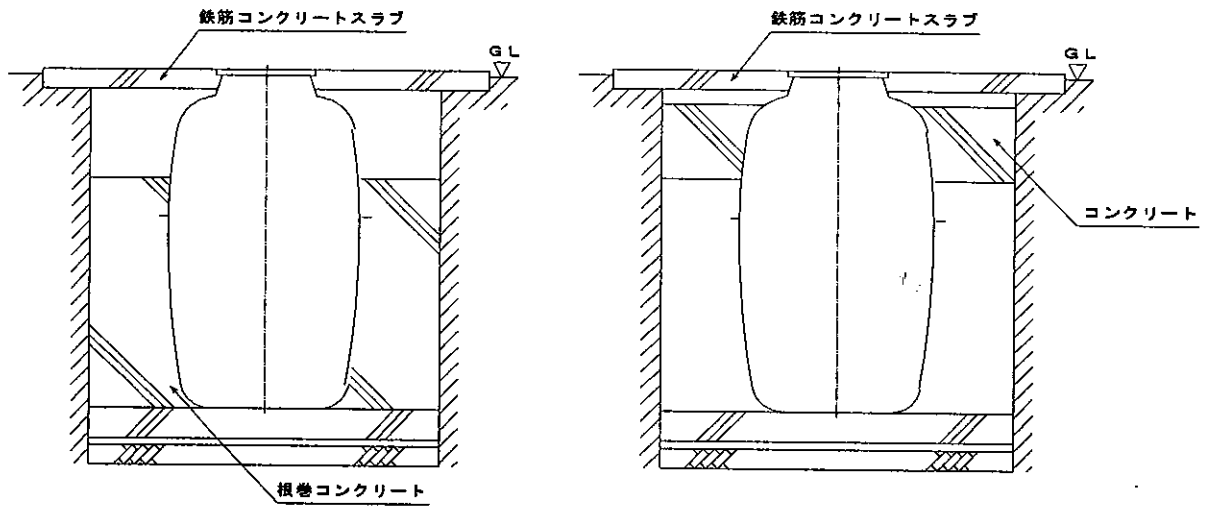
2) 寒冷地対策

- a) 積雪が少なく寒さが厳しい地域での設置は建物から槽までの排水管は凍結を防止する為に、凍結深度以下に埋設する。場合によっては排水管の上部に保温材を埋めて下さい。
- b) 槽本体の埋設は排水管との関係より深くなる訳ですがこの場合原水ポンプ槽工事、ピット工事等が必要となります。

3) 地下水位が高い場合の工事の方法及び浮上防止対策

- a) 地下水位の多い場所や軟弱な地盤の場合の掘削は、必ず土留工法、水替工法等適切な方法を選択して下さい。

浮上防止対策の方法



金具を使用した浮上防止図

(1 1) 基礎に高低差が生じる場合の対策

流入（原水）ポンプ槽や放流ポンプ槽を設置したもので基礎に高低差が生じる場合は一つの連続した基礎とし段差部は地盤沈下によるずれが生じないように配筋をすること。尚、段差が基礎厚以上になる場合ははり型を設けておさめる必要があります。

(1 2) 据え付け方法

1) 本体据え付け工事

a) 墨出し

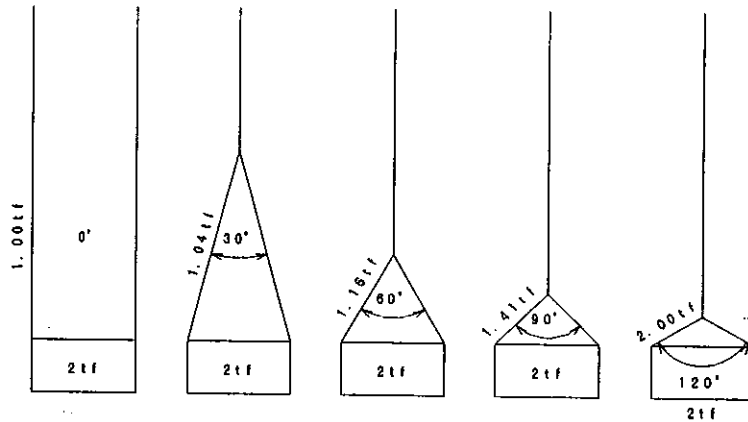
底版コンクリートの上を通り芯、槽本体の位置等の墨出しを行う

b) 吊込み、吊降ろし

小規模な浄化槽であっても、相当重くなっているので安易な考えで吊込みや吊降ろしをしないようにして下さい。

製品重量

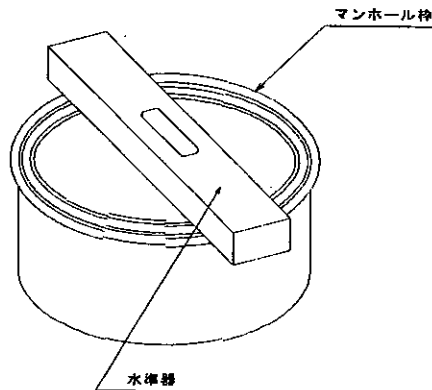
NS-5	240 kg
NS-6	250 kg
NS-7	265 kg
NS-8	312 kg
NS-10	370 kg



つり角度とロープの張力

c) 槽本体の据付

- ・槽本体を底版コンクリート上の所定の位置に、石等を落とさないように静かに吊り降ろして下さい。
- ・FRP製は面圧には強いが尖圧には弱いので底版の突起物等には特に注意して下さい。
- ・槽本体の水平を確認して下さい。



注) 水準器をマンホール枠上で、各方向に当て槽の水平を出して設置して下さい。

水平の確認方法 (槽据付時)

水平の確認方法 (水張り後)

各層内の隔壁に記されている水準目安線 (1本)、水位線3本 (5cm間隔) により水平の確認をする

d) 内部機器類の確認

槽本体の据付け後、次の項目をチェックして下さい。

- ・ろ材や接触材及びその押さえに変形や破損がないか。又、ずれていないかどうか。
- ・空気管、散気装置が外れていないか。
- ・越流せきが外れていないか。
- ・滅菌器（薬剤筒）がセットされているか。
- ・汚泥移送ポンプ（エアリフトポンプ）が所定の位置に納まっているか。
- ・その他の機器類、例えば、放流ポンプ、レベルスイッチ、流入ポンプ等がある場合、所定の位置に納まっているか。
- ・槽内部に異物が落ちていないか。

e) 水張り

槽の内部に異常のないことを確認して水張りを行う。その目的は次の通りです。

- ・槽本体を安定させ、埋戻しの際に本体が据付け位置からずれたり、水平がくるうことを防止する。
- ・埋戻しの際の土圧による本体及び内部設備の変形等が生じるおそれを防ぐ。
- ・水準目安線等から水平を確認する。
- ・槽本体の漏水試験を行う。

2) 埋戻し工事

a) 埋戻し

槽内部に、水張りが行われたことを確認してから埋戻しを行います。埋戻しの際は途中で何度も水をまき、水締めを行って埋戻し土の内部に空隙がないように行います。埋戻した箇所からランマー等を用いて突き固めていく。水締めと突き締めに交互に行って下さい。

b) 残土処分

- ・残土は処分しなくてはならない。

残土の処分方法は、工事着手前に関係者との打ち合わせで工事現場の敷地内で処分するか（場内処分という）、敷地外で処分するか（場外処分という）を決めておく必要があります。

堀削した土の容積は、土質によっても異なるが、堀削前の自然土の容積に比べて通常2割程度増加します。

- ・埋戻しを行った後、残土処分を行う場合のダンプトラックの手配はこれらを考慮して行って下さい。

3) 上部スラブコンクリート工事

上部スラブコンクリートは、点検時の作業を容易にすると同時に、雨水が槽内部に進入することを防ぐ役割を果たすほか、浮上防止のための下向きの力として作用するなど構造上の役割も持っています。尚、上部スラブの内容については上載荷重や仕上げ等の条件により仕様の決定をする。

(13) 流入管渠、放流管渠工事の方法

1) 工事

a) 管路の堀削

堀削はでこぼこの無いように真っ直ぐ根切りし基礎となる地盤を乱さないようにして下さい。

・やり方

管路のやり方は10mごとに設け、位置、高低等を正確に表示して下さい。

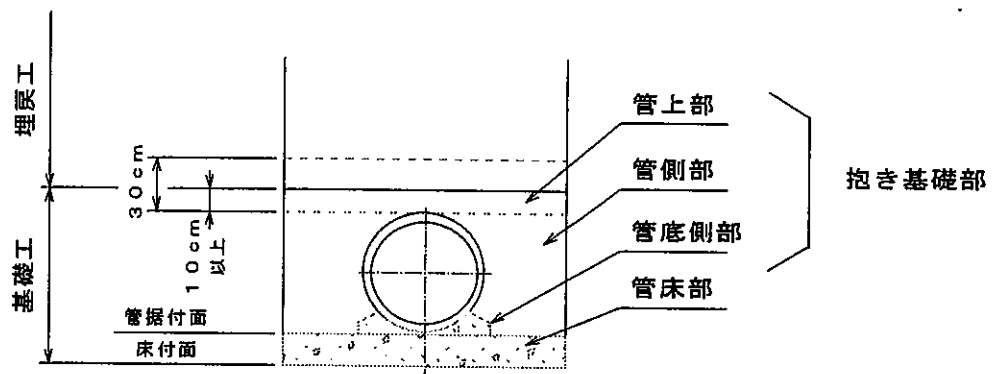
・堀削幅

堀削の幅は直径及び深さに応じたものとし、その最小幅は30cmとして下さい。標準的な堀削幅は $\phi 150$ 以下で50～60cmです。

・堀削底面

堀削底面は掘り過ぎ、こね返しが無いようにし、管の勾配に合わせて仕上げして下さい。

b) 基礎工(管床部)



・床付面

床付面は人力で溝底の凸凹をなくし、所定の縦断勾配となるように平たんに仕上げる。がれきや木の根等の固い物は、管に悪影響を及ぼすので必ず取り除いておく必要があります。

・管据付面

良質地盤の場合

一般に管底部の砂の厚さは、床ならしのため10cm以上とし、管据付け面の仕上げは設計管底高さ、勾配に注意しながら振動コンパクターなどで十分転圧して下さい。

軟弱地盤の場合

あらかじめ栗石や碎石等を投入し、足で踏み固めて管底部の砂が転圧できるだけの支持力を出しておく。砂厚は地盤の程度にもよるが、10cm位は必要です。軟弱の度合によっては砂利などによって置き控え、目つぶしを施し十分突き固め、不同沈下を防ぐ措置をして下さい。

c) 管布設

・管の布設

管はやり方に合わせて中心等を定め、勾配を正確に保って布設して下さい。

・管の接合

受口内面及び差口外面をきれいに拭い、受口内面、差口外面の順に接着剤を刷毛で薄く均等に塗布する。接着剤塗布後は速やかに差口を受口に挿入して下さい。差込みは、挿入機やてこ棒を使用して下さい。

d) 柵の施工

柵の施工に当たっては、次の事項を考慮する。

・掘削幅

柵の設置場所の掘削は、据付けを的確に行うために必要な余裕幅をとり、その他は管路の掘削に準じる。

・基礎

柵は管に比べて重く、また、直接荷重が加わるため、沈下を起こす恐れがあるので、碎石又は砂を敷き均らし、十分突き固めて、厚さ5 cm程度に仕上げた基礎を施す。既製品の底塊を使用しない場合は、更に5 cm程度のコンクリートを施して下さい。

・柵の築造

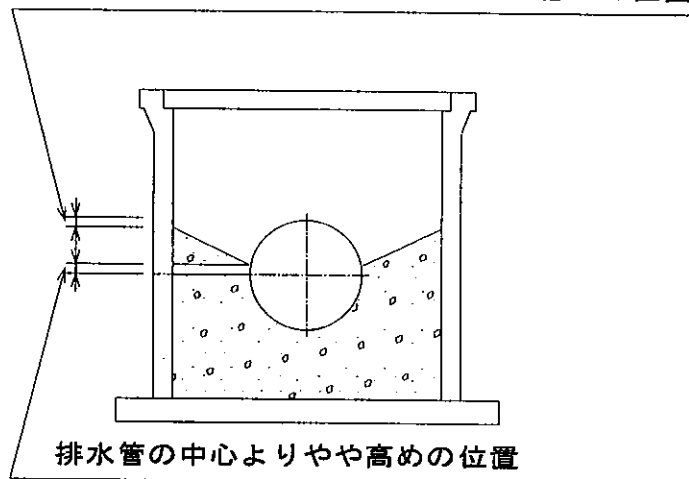
既製ブロックやプラスチック成形品を用い、堅ろうに所定の構造、寸法に仕上げして下さい。

底部の築造

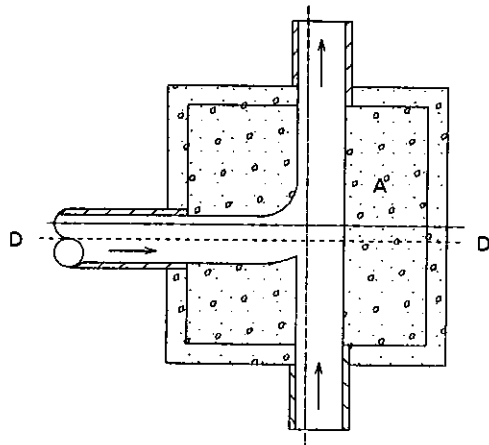
既製の底塊を使用する場合は、接続する管路の流れ方向とインバートの方向及びその形状等に注意して下さい。現場施工のインバートは半円形とし、表面は滑らかに仕上げる。又、図示した通りインバートの肩は汚物が堆積しないようにし、水切りを良くするために適切な勾配を設けて下さい。

柵の上流側と下流側の管底差は、1～2 cmの落差とします。

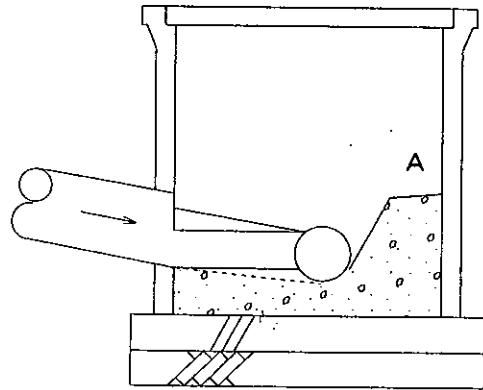
インバートの法肩は管の天端よりやや低めの位置



インバートが直角に会合する場合は、図のAの部分に汚物が乗り上がらないように、D-D断面に示したインバートの肩の部分をやや垂直に管頂の高さまで傾斜をつけて仕上げる。流れをスムーズにし維持管理を容易にするため管路の中心をずらしインバートの屈曲半径を大きくしT字形として下さい。



T字管会合の施工



e) 埋戻し

埋戻しは管、柵の移動、損傷等を起こさないように注意し、入念に突き固めながら行う。

- ・接合部の硬化後の埋戻し
管の布設後、接合部の硬化を待って良土質で管の両側を均等に突き固めながら入念に埋戻して下さい。
- ・仮固定材の取外し
埋戻しは管路の区間ごと（流入側、流出側）に行い、管布設時に用いた仮固定材は順次取り除いて下さい。
- ・厳寒期の施工
氷雪や凍土が混入しないように注意し、掘削した日のうちに埋戻すようにして下さい。
- ・車両等の上部荷重のある場合
必要に応じて上面スラブ打ち等を行って下さい。

(14) 管の接続方法

1) 配管内容

配管は流入管、流出管、（放流管）などの排水配管とブロワーからの送気管の空気配管がある。他には原水ポンプ槽や放流ポンプ槽等の付帯装置関係の配管があります。

2) 配管材料

硬質塩化ビニール管（PVC）は水密性耐薬品性に優れ、軽量で施工性も良い材料です。VU管、VP管ともに各種の継手があり、接合方法は、接着接合がほとんどであり、他にはコンクリート柵との接合にモルタル接合をする場合があります。

3) 配管上の留意事項

a) 流入管及び放流管の勾配

浄化槽に使われる小口径の配管勾配は、常識的な値として「管径（mm）分の1」程度とする。 $\phi 100$ の場合は $1/100$ 、 $\phi 125$ の場合は $1/125$ 、 $\phi 150$ の場合は $1/150$ の勾配とします。

b) 土かぶり

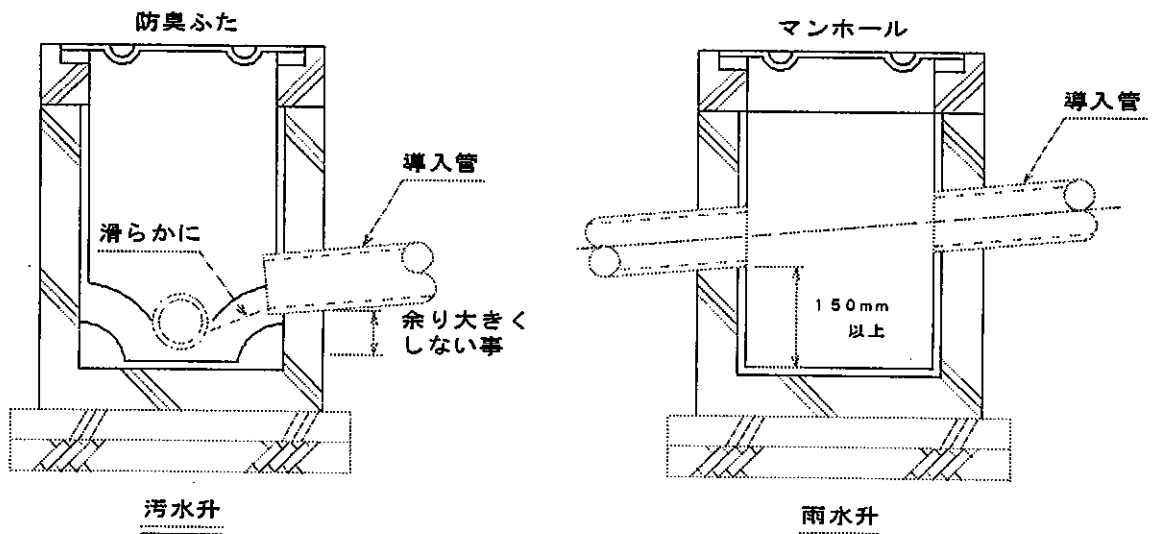
管の上面より地表までの部分を土かぶりおよび、できるだけ厚くすることが必要である。土かぶりの少ない配管は、わずかな荷重に対しても大きな鉛直力を受けて損傷し易い。一般に配管の起点における土かぶりは通常20cm以上、荷重のかかる場所で60cm以上とすることが望ましい。しかし、放流先や勾配の関係で十分な土かぶりが困難な場合はヒューム管など外圧に強い材料を選ぶか、スラブ打ちなどによる保護策が必要です。具体的な留意点は、次の通りです。

- ・配管の上部に人の通行等がある場合は、20cm以上の覆土をすることが望ましい。
- ・自動車等が通る場合は、スラブ打ちを行っていること。
- ・雨水等により土砂が流出し、管が露出する恐れがないこと。
- ・やむを得ず露出配管とする場合は、外部からの衝撃に対する防護策や耐候性等が配慮されていること。

c) 柵の位置及び種類

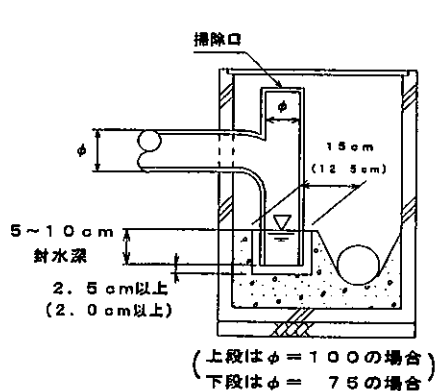
柵の設置位置は、次の点に留意する。

- ・起 点・・・各排水が屋外に出た所に柵を設けて下さい。
- ・屈曲点・・・45度以上の屈曲点、落差のある所に設けて下さい。
- ・合流点・・・2系統以上の排水の合流点に設けて下さい。
- ・間 隔・・・直線部分においても管路の点検や清掃が行える間隔に設けて下さい。「下水道排水設備指針」では、排水管の内径の120倍を超えない範囲で柵を設けることとなっています。市町村の施工基準が定められている場合にはそれに従って設けて下さい。
- ・柵の種類は、流入管はすべてインバート柵とし、雨水等が入らないように密閉できる蓋となっていることが必要です。



汚水升（インバート升と雨水升の違い）

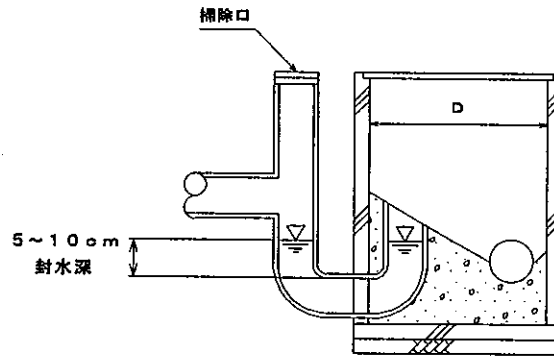
- ・トラップ柵は防臭のために設ける。図に示すT型トラップ柵やJ型トラップ柵はどちらもトラップと汚水柵の兼用形の例であり、浴室、流し場、その他の床排水の流出箇所に設置する柵です。



(上段はφ=100の場合)
下段はφ=75の場合

- 注) 1 現場打ちの場合、内径又は内のり寸法(D)は45cm以上とする。
2 工場製品の場合、φ100mmのとき内径又は内のり寸法(D)は35cm以上、φ75mmのとき内径又は内のり寸法(D)は30cm以上とする。

T型トラップ升の例



注) 内径又は内のり寸法(D)は30cm以上とする。

J型トラップ升の例

トラップ桝の留意点は次の通りです。

- ・二重トラップとにならないようにする。例えば、風呂場の排水管のトラップがついている場合は、屋外配管の始点はトラップ桝を設けてはならない。
- ・臭気、衛生害虫等の移動を有効に防止できる構造とします。
- ・汚物等が沈殿しない構造とします。
- ・容易に掃除ができる構造とします。

d) 桝の大きさは、管路の清掃や点検を容易に行うため、次の点に留意して下さい。

- ・内径は内のり30cm以上の円形又は角形とします。
- ・堅固で耐久性のある構造とします。

(15) 送風機の取付方法

1) 送風機の設置場所の選択

送風機の据付け場所の選択は、次のことに留意して決めておいて下さい。

- a) 送気配管の距離ができるだけ短くてすむ位置。
- b) 保守、点検に必要な空間が確保できる位置。
- c) 湿気が少なく、風通しがよい位置。
- d) 浄化槽水位より低くならない位置。
- e) 通行その他じゃまにならない位置。
- f) 運転音が気にならない位置。
- g) 冠水の恐れのない位置。

2) 送風機の据付

- a) 送風機の基礎はコンクリート、又は捨てコンクリートの上に所定の架台を据える法方で作り、高さは地盤面より10cm以上高いレベルとし水平に仕上げます。
- b) 送風機は、基礎の上にそのまま置くだけで構いません。アンカーで固定したり、基礎の上に滑りやすいプラスチック板や金属板を敷かないで下さい。標準付属品以外のカバーを設ける場合は、接触しないよう送風機本体から離して下さい。
- c) パイプのサイズはVP13です。但し、配管距離が長いと(約10m以上)圧力損失が多くなりますので、やむを得ず長くなる場合は、管径を大きくして下さい。なおこの場合、圧力のチェックが必要です。
- d) 管内には、小石、土、パイプの切り屑などが入らないように注意して下さい。
- e) 継手類の接続は漏れが生じないように十分に差し込みます。

3) 電気工事

- a) 電気工事は有資格者でなければ実施できません。必ず専門業者に依頼して下さい。浄化槽に使用されるすべての電気機器の仕様を正しく電気工事担当者に伝えて下さい。(電気工事士)
- b) 電源は単相交流100V、60Hzで、浄化槽専用の電源を設けて下さい。送風機に近く建物の外壁に、カバー付屋外防水コンセントを設けるのが普通です。
- c) 電源には浄化槽専用あるいは他の機器との共用で漏電遮断機を設け、送風機には第三種設置工事(アース)を施して下さい。
- d) 送風機の電源ケーブルは、送風機カバーの下から引き出し、電源コンセントまでは固定しないで下さい。
- e) 送風機を電源から離れて設置する場合には、ケーブルの固定保護・地中埋設等の配管工事が必要になります。その場合には電気設備技術基準及び内線規定に従って施工して下さい。

(16) 工事終了時の後片付け

余盛りとして必要な土砂以外は、浄化槽の回りに積み上げないようにし、周囲の水捌けを良くしておく。本体、配管及び柵の中に土砂、モルタル片、管の削りかす、プラスチックの破片等があれば、水の流れを妨げる恐れがあるので、取り除く。又、既製の単独処理浄化槽がある場合には、管理者と協議し、撤去するか、あるいは後日危険のないように土砂等で十分に埋めておく。

(17) 工事終了時の検査方法

1) 工事内容の確認

工事終了後も検査には、目視やバケツ等を用いて水を流すなどして表中の項目についてのチェックを行う。

工事の確認項目

検査項目	チェックのポイント
1. 流入管きよ及び放流管きよの勾配	汚物や汚水の停滞がないか。
2. 放流先の状況	放流口と放流水路の水位差が適切に保たれ、逆流の恐れはないか。
3. 誤接合等の有無	生活排水が全て接続されているか。
	雨水や工場排水等が流入していないか。
4. 升の位置及び種類	起点、屈曲点、合流点及び一定間隔ごとに適切な升が設置されているか。
5. 流入管きよ、放流管きよ及び空気配管の変形、破損の恐れ	管の露出等により変形、破損の恐れはないか。
6. 嵩上げの状況	バルブの操作などの維持管理を容易に行うことができるか。
7. 浄化槽本体の上部及びその周辺の状況	保守点検、清掃を行いにくい場所に設置されていないか。
	保守点検、清掃の支障となる物が置かれていないか。
	コンクリートスラブが打たれているか。
8. 漏水の有無	漏水が生じていないか。
9. 浄化槽本体の水平の状況	水平が保たれているか。
10. 接触材等の変形、破損、固定の状況	嫌気濾床槽の濾材及び接触ばっ気槽の接触材に変形や破損はないか。
	しっかり固定されているか。

検査項目	チェックのポイント
11. ばっ気装置、逆洗装置及び汚泥移送装置の変形、破損固定及び稼働の状況	各装置に変形や破損はないか。
	しっかり固定されているか。
	空気の出方や水流に片寄りはないか。
12. 消毒設備の変形、破損、固定の状況	消毒設備に変形や破損はないか。
	しっかり固定されているか。
	薬剤筒は傾いているか
13. ポンプ設備（流入ポンプ及び放流ポンプ）の設置、稼働状況	ポンプ升に変形や破損はないか。
	ポンプ升に漏水の恐れはないか。
	ポンプ2台以上設置されているか。
	設計どおりの能力のポンプが設置されているか。
	ポンプの固定が十分行われているか。
	ポンプの取りはずしが可能か。
	ポンプの位置や配管がレベルスイッチの稼働を妨げる恐れはないか。
14. プロウの設置、稼働状況	防振対策がなされているか。
	固定が十分に行われているか。
	アースはなされているか。
	漏電の恐れはないか。

2) 試運転

浄化槽の内部設備及びブロワ、ポンプ等の機械設備については試運転により状況の確認及び調整を行う。

a) 嫌気濾床槽

ブロワを運転した状態で、バケツ等により水を枳から何杯か流してみ、次の事項について確認します。

- ・流入管底と水面との落差は、所定どおりの高さになっているか。
- ・各室の移流管が2箇所以上ある場合は、均等に水の流れがあるか、また、第2室流出口を通して接触ばっ気槽から槽内水の自然移送が行われている場合は移送されている水量が均等であるか。
- ・汚泥移送間のポンプを稼働させたときに、汚泥移送間の流出管底との落差が十分であるか。

b) 接触ばっ気槽

- ・ばっ気による気泡が均等に出ていること、また、水流に片寄りがないことを確認します。
- ・空気逃しバルブの操作によって、送気量の調節が可能であることを確認します。

c) バルブ操作により送気の切替えを行い、逆洗装置から均等に十分な気泡が生ずることを確認する。また、その際接触材がしっかり固定されており、動いたりしないことを確認します。

d) 汚泥移送装置を稼働させて、嫌気濾床槽第一室と確認します。また、バルブ操作によりエアリフトポンプの汚泥移送能力が可変できることを確認します。

e) 沈殿槽

- ・越流せきが水平で、せきの全面から均等に集水できることを確認する。

f) 消毒槽

- ・流水時に薬剤と処理水と接触していることを目視で確認する。
- ・放流管底と消毒槽の水面が所定の高さとなっていることを確認する。

g) ポンプ設備の稼働状況

・レベルスイッチの作動状況

ポンプ枳の平面積が小さい場合には、フロート式スイッチを用いると、フロートが配管等に引っ掛かってしまうため、ポンプの誤作動を生じることがある。ポンプを作動させてみて、フロート式スイッチが正しく作動できる状況にあることを確認します。正しく作動できない恐れのある場合は、電極棒式レベルスイッチとする必要があります。

・ポンプの稼働状況

汚水ポンプは、通常同一能力のものを2台備え、故障時や多量の汚水の流入時に対応させるため交互運転とするが、2台は、普段から自動的に交互運転できるようにリレー回路を組んでおく。レベルスイッチの作動に合わせて、2台のポンプが自動的に交互運転となることを確認して下さい。

h) ブロワの稼働状況

異常な騒音、振動が生じてないことを確認して下さい。

i) マンホール蓋

蓋がしっかり固定できないと、臭気の発散の原因となったりするので、密閉できることを確認して下さい。また、しっかりとロックできることを確認して下さい。

(18) 浄化槽管理者への引渡し時の留意事項

所轄の官庁の竣工検査を受けた後、説明書類（型式認定シート、竣工図面、届出書類の写し、維持管理仕様書等）とともに、正しい使用方法や注意事項を説明して、使用者、管理者に引渡しを行って下さい。特に、新築の場合には、竣工後しばらくたってから使用を開始する場合があります。また、使用者が管理者と同一でない場合や、管理業者が未定の場合がある。そのような場合には、使用方法や使用の注意事項に関するパンフレットは使用者に、維持管理仕様書、認定シート等は管理業者に、届出書類の写しや竣工図面等は管理者に渡るように手段を講じる必要があります。